原　著

ミクローマクロ問題――相互行為論からのアプローチ

内田　健*

The Micro-Macro Problem : An Interactionist Approach

Ken Uchida*

Abstract

Since the 1980's "The Micro-Macro Problem" has become one of the critical issues in sociology. Theorists in various fields of social study have presented their own ideas to solve this problem. Most of them agree on the point that we should regard the distinction between both levels not as substantive but as analytic. They also share the view that we shouldn't divide any theoretical approaches into exclusively micro- or exclusively macro - sociology. As is suggested in the slogan of an anthology on the problem: "From Reduction to Linkage", what we have to work on is to link "the micro" and "the macro" in some appropriate way.

This paper tries to trace a series of efforts for the linkage made from the standpoint of a particular theoretical perspective: Interactionism. Although this approach has been categorized as a branch of the micro camp, some interactionists who disapprove the categorization claim that Interactionism has distinctive ideas for grasping "the macro". An examination of two of those ideas: "joint act" and "negotiated order" shows that Interactionists *do* have an analytical idea that may avoid the problem.

1．はじめに

社会学においてミクローマクロ問題（Micro-Macro Problem）が枢要な論題の一つとして浮上してきたのは，おおよそ1980年代以降のできごとである。とはいえ，ミクロとマクロとを類別する思考法じたいは――中世後期における「個人」と「国家」の同時的成立という歴史的契機にその起源をもとめる論者もいるように（Alexander and Giesen, 1987：3）――，きわめて長い履歴をもっている。ミクロとマクロを対比する通例的表現の一つに《ウェーバー 対 デュルケム》という二人の学祖の固有名が使われていることからも，社会科学の一分科として成立した社会学においてこの二項類別的思考法が深く根を張っていることは容易に推察できよう。

ミクローマクロ問題が提出しているのは，ミク

*人間基礎科学科　　*Department of Basic Human Sciences

ロ的な領域とマクロ的な領域とをいかに架橋すべきかという問いである。じじつ，1980年代以降に公刊されたミクロ―マクロ問題のアンソロジーが掲げたのは，両領域の「統合 integration」(Knorr-Cetina and Cicourel Eds, 1981) や「連結 link」(Huber Ed., 1991) といったテーマであり，「還元からリンケージへ from reduction to linkage」(Alexander and Giesen, 1987) というスローガンであった。そうしたアンソロジーへの寄稿者の研究来歴もまた多様であり，階級闘争，階層構造，人口動態，政治過程，権力現象といった問題に取り組んできたいわゆる「マクロ社会学者」もいれば，会話場面のような対面的行為の微細な分析に取り組んできたいわゆる「ミクロ社会学者」もいる。異質な知的背景をもち，基本的な理論的前提について対立しもする寄稿者たちを束ねうるものがあるとすれば，それはひとえにミクロ―マクロ・リンケージの流れに棹さすことによって社会理論の陥っている閉塞状況を打開しようとする一点について，問題意識が共有されていることにあろう。

ところで，ミクロ―マクロ・リンケージをめぐる一連の論稿の多くは，社会学が二つの陣営に分かれて各自ミクロとマクロの区分を社会的事象と実体的に対応するものと見立ててきた点に理論展開の阻害因を看取し，対案として両者をあくまでも分析的類別 an analyatic distinction としてとらえようとしている。あるアンソロジーの編者たちの言葉を借りれば，それらは「社会的現実の構成についての互いに相容れない考え方を対立させるのでなく，異なる水準にある社会的現実のあいだの経験的な諸関係をみつけだそうとする」試みとして認定することができる (Alexander and Giesen, 1987 : 2)。

ここで留意すべきことは，従来ミクロ陣営とマクロ陣営の関係はけっして対称的なものではなく，マクロ陣営が社会学の正統的アプローチとしての待遇を享受してきた一方で，ミクロ陣営はマクロな事象を把捉する視角を欠いているとの論難を甘受してきたという事実である。相互行為論 Interactionism[1]もまた，ミクロ社会学の一変種として，マクロ陣営による批判の標的とされてきた。本稿は，相互行為論の基礎視角に即してそうした批判の妥当性を問い直すとともに，このアプローチがミクロ―マクロ・リンケージという問題圏のなかでとりうる立場について一定の見通しを得ることをめざす。

2．相互行為論とミクロ―マクロ問題

《相互行為論は「制度」や「社会組織」といったいわゆる「マクロ」な社会的事象を分析する視角を欠く「非構造的に偏向した astructurally biased」アプローチである》という言辞は，相互行為論を批判的に論評するさいのクリーシェの一つといっても過言ではないだろう。

相互行為論にとって，ミクロ―マクロ問題は「内発的」なものではなかった。問題の発端は，このアプローチにたいする批判的評言にある。相互行為論がシカゴ学派のエートスを明識化する「運動」として台頭した1950～60年代当時，アメリカ社会学において「主流派」なり「標準的」といった形容詞に相応したのは構造機能主義や闘争理論であった (Flaherty, 1989; Mullins and Mullins, 1973)。H.ブルーマーがG.H.ミードの思索から社会学的な含意を抽出するかたちで提出した相互行為論のルート・イメージと方法論は，「主流派」からのはげしい論難に遭遇する。相互行為論の立論構成と方法論的指針が理論的・方法論的に「標準的社会学」と対立する論点を本来的に内蔵していたことに加え，ブルーマーのテクストじたいが対抗的潮流にたいしてことさら挑戦的な修辞を多用したことが，こうした厳しい反応をみずから招き寄せたともいえよう。

相互行為論への批判はその社会観（ルート・イメージ）と方法論の両面にたいしておこなわれたが，本稿の課題に直接関連するのは前者である。主流派による批判は，相互行為論のルート・イメージには社会組織，社会構造，社会制度といった事象を適切に記述する視点が欠如しているという論点に集約される。相互行為論のインサイダーにも，みずから「非構造的偏向」を認めて批判に同調する者があらわれた (Meltzer et al., 1975 : 113)。かれらは，相互行為論が自己との反省的な相互行為にもとづいて社会的世界を織り上げる自

由で主体的な行為者像を強調する一方で，行為の遂行が政治的・経済的・歴史的諸拘束（たとえば，利用可能な社会的資源の多寡，権力関係，文化被規定性）によって囲繞されている事実を無視ないし軽視していると指摘した（Meltzer et al., 1975 : 99)。「非構造的」というレトリックは，「主観主義的」「主意主義的」「観念論的」「個性記述的＝反理論的」といった系列語彙を導出しながら「主流派」の批判的論拠の中核として機能し，相互行為論を「ミクロな現象の記述と分析に専心する社会心理学的アプローチ」という位置づけへと追いやった。こうしたイメージは(その大半が「主流派」社会学者の手になる）社会学理論の概説書や，社会学者の公式・非公式のディスコースをつうじて普及し，相互行為論における「マクロな」視点の欠如という「神話」の定着を帰結した（Maines, 1988 : 46 ; Flaherty, 1989)。

相互行為論は，社会的事象一般を対象とする包括的パースペクティヴとしての待遇を要求する以上，主流派とその同調者から突きつけられた問いに答えねばならなかった。換言すれば，みずからの射程範域について下された状況定義を，いわば定義し返す必要に迫られたのである。再定義はおおむね二つの方角を志向した。

一方には，ブルーマーのミード解釈に疑義を提出し，両者を切断することにより，ブルーマーとかれの影響を受けた相互行為論（いわゆる「シカゴ学派」)のテクストについては非構造的偏向を認める一方で，ミードのテクストには構造把握の視角が明確に存在しており，そうした偏向にたいする責任はないとする議論がある（e.g. Wood and Wardell, 1983)。いわゆる「イリノイ学派」によるブルーマーのミード解釈批判が志向した方針がこれにあたる。ここでは便宜的に外在的再定義と呼んでおこう。

もう一方には，ブルーマーら「シカゴ学派」のルート・イメージは，指摘に反してマクロ的・構造的な事象へのアプローチをなんら排除してはいないとする議論がある。主要な作業としては，シカゴ学派相互行為論が形成された歴史的文脈の再構成（Fisher and Strauss, 1978)，ブルーマーのテクストの全般的かつ精密な読解（Maines, 1988 ; 1989)，相互行為とそれを取り巻く構造コンテクストとのインターフェースに照準しながらミクローマクロの連接を図る独自の方針の策定と実践（Strauss, 1978)，などをあげることができる。こちらは内在的再定義と仮称する。

外在的再定義の立場からする主張はブルーマーらの相互行為論が構造的視野をまったく欠いているという前提に立っており，内在的再定義の試みが妥当なものであれば立論の一角を崩されることになる。そこで，以下では内在的再定義の議論に寄り添いながら，相互行為論にとってのミクローマクロ問題を考えていきたい。

まず，内在的再定義の動向について，簡単な見取り図を描いておこう。ミクローマクロ問題が社会理論全般にまたがる枢要な課題として浮上した時期と多少前後して，相互行為論の立場からミクローマクロ問題に取り組んだ論稿がつぎつぎと発表される。D.R.メインズの総説的な論稿（Maines, 1977）は相互行為論に伏在する「社会構造」や「社会組織」にたいする分析視角の明示化を提唱し，後続する議論の呼び水となった。また，主要な相互行為論者が社会学会の会長就任講演でミクローマクロ問題を主題に取り上げていることは，この問題が重要な位置づけを与えられていることを示唆するものである（Goffman, 1983 ; Hall, 1987 ; Fine, 1992)。

相互行為論の立場から提出されてきたミクローマクロ問題をめぐる一連の議論は，以下のように二つの主題に集約することができる。

一方では，ブルーマーの描いたグランド・デザインの再検討・再評価という作業がすすめられてきた。ブルーマーのルート・イメージに照準を据えた総論的な水準では，ブルーマーのテクストからマクロ社会学的視角を析出する試行が提出されている（Lyman, 1988; Maines, 1988; 1989; Fine, 1991)。それと併行して各論的な水準では，人種関係論や産業組織論といった個別具体的な研究領域におけるブルーマーの「マクロ社会学」的な業績の発掘，再評価もすすんでいる（Lyman, 1984; Lyman and Vidich, 1988; Blumer, 1990; Maines and Morrione, 1990; Maines, 1990; Morrione, 1991; Strauss, 1991; Lyman, 1991)。

もう一方で，相互行為論の立場から提出された個別理論である「交渉的秩序アプローチ Negotiated Order Approach」のもつ可能性の探索が，さまざまな論者によってすすめられている。まず，このアプローチを提唱し，中心となって精緻化を図ってきたA.L.ストラウスによる一連の理論構築作業がある（Strauss et al., 1964; Strauss, 1978a; 1982b; 1993）。また，このアプローチをめぐる総説的評価と理論的整備が多くの著名な論客を巻き込むかたちで進展をみせている（Manning, 1977; Day and Day, 1977; Maines, 1978; Farberman et al., 1979; Scanzoni, 1979; Hall and Spencer-Hall, 1982; Fine and Kleinman, 1983; Fine, 1984; Maines and Charlton, 1985; Musolf, 1992）。さらに，このアプローチが「ミクロ―マクロ問題」のコンテクストと深くふれあっていることを顕在化すべく，両水準を媒介する「メゾ領域 Meso Domain」が提唱され（Maines, 1979; 1982; Pestello and Voydanoff, 1991; Hall, 1991），交渉的秩序論と相互補完的な関係にある議論として「社会的世界論 Social World Perspective」が展開されてきた（Kling and Gerson 1978; Strauss, 1978b; 1982a; 1984; Becker, 1974; 1982; Clarke, 1991）。

これらの議論が提出している論点の萌芽は，「連携的アクト joint act」というブルーマーのアイデアのなかに見いだすことができる。そこで，次節では連携的アクト論の立論構成を確認しておきたい。

3．ブルーマーの連携的アクト論

「連携的アクト」は，従来のブルーマー論においては相対的に閑却されてきた概念である。かれの業績にたいして肯定的／否定的いずれの態度をとるにせよ，焦点はもっぱら行為者の内省過程を説明する自己相互行為 self-interaction 概念に集められてきた。しかし，各所で明言されているように，ブルーマーにとっては連携的アクトこそが，相互行為論のルート・イメージに立脚する社会学的な分析の基本単位であった（Blumer, 1969 : 17＝訳 : 22, 70＝訳 : 90; 1981 : 158）。

連携的アクトとは「個々の参与者が行動の路線をたがいに撚り合わせることで成立する，比較的規模の大きい行為の集合的形態」であり，「二人の個人による単純な活動の共同から，巨大な組織体ないし制度体による行為の複雑な配列に至る」社会生活や集団生活のあらゆる場面に適用可能な概念として提出されている（Blumer, 1969 : 70＝訳 : 90）[2]。

図1に示したように，自己相互行為や解釈といった内省過程は連携的アクトを構成する社会過程における一位相 covert phase として位置づけられている。ブルーマーの言述から連携的アクトの基本形式を抽出すると以下のようになる（Blumer, 1969; 1981; 1983）。

①行為単位 acting unit A は自己相互行為過程（自己指示 self-indication と解釈 interpretation）をとおして個別アクト individual act を構成する。

②Aの個別アクトは行為単位Bにたいする指示 indication となり，行為単位Bの個別アクトをみずからのアクトへの解釈として受け取る（Bの個別アクトも自己相互行為をへて構成される）。Aの個別アクトとBの個別アクトとの調整過程を社会的相互行為 social interaction と呼ぶ。

③社会的相互行為が構成するひとまとまりの出来事を連携的アクトと呼ぶ。

位相に着目して連携的アクト論の構成を分析すると，つぎのように二つの断面図を描くことができる。

第一に，自己相互行為と社会的相互行為 social interaction という二つの過程位相 process phase と個別アクトと連携的アクトという二つの完成位相 completion phase とに類別することができる。相互行為とは，複数の身振りが撚りあわされ，身振り間の関係が調整されるプロセスである。相互調整の結果，一つのアクトが完成し，そこで身振りの意味が確定する。

第二に，過程位相としての相互行為は，自己相互行為という内的位相 covert phase と社会的相互行為という外的位相 overt phase とに類別する

ことができる。二つの相互行為過程はともに，指示－解釈のやりとりという相同的構成を与えられている。文字どおりの意味で，自己相互行為は内在化 internalize された社会過程として位置づけられる。連携的アクト論において内的位相として措定されているのは，自己相互行為だけである。外的位相にある個別アクト，社会的相互行為，連携的アクトは，本来的には観察可能である。さらに，自己相互行為－個別アクト－社会的相互行為－連携的行為があくまでも不断に進行する一つの社会過程のなかに織り込まれていることを確認しておく必要がある。自己相互行為じたいはたしかに内省的・主観的なプロセスであるが，内的位相における自己指示－解釈のやりとりからいかなる「仮説」が立てられようが，その「仮説」の妥当性は外的位相における対向的行為単位の反応をとおして「検証」されねばならない。ブルーマーのルート・イメージにおいて，内省的・主観的な仮説策定プロセスはたしかに重要な契機として待遇されている。しかし，ブルーマーにたいしてしばしば投げかけられる「主観主義」という論難は，自己相互行為が連携的アクトの一位相であることを（偶然にか意図的にか）見落としている。

ブルーマーは，連携的アクト概念の含意を三つあげている（Blumer, 1969 : 17-20＝訳 : 22-26, 71-72＝訳 : 92; 1981 : 150, 162-165）。各自に関連する重要な論点を併せて掲示しよう。

①連携的アクトの反復性：大部分の連携的アクトは，反復的・安定的・規則的・儀礼的に遂行される。

参与する行為単位はアクトの形成にあたって，あらかじめ共有している共通の状況定義に依存し，またこれを利用する。アクトを形成するたびごとに状況定義をあらたに作り出す必要はない。アクトは社会的に組織化された出来事を産出する枠組として機能する。すなわち，連携的アクトは「構造化」されている。

とはいえ，反復的・儀礼的なアクトも，更新的にその都度形成されねばならない点は新規のアクトとおなじである。固定的な形式を維持するためには，変化を引き起こすこととおなじく社会的相互行為が実際におこなわれ，連携的アクトが実際に形成されなければならない。

②連携的アクトの水平的連結 horizontal lin-

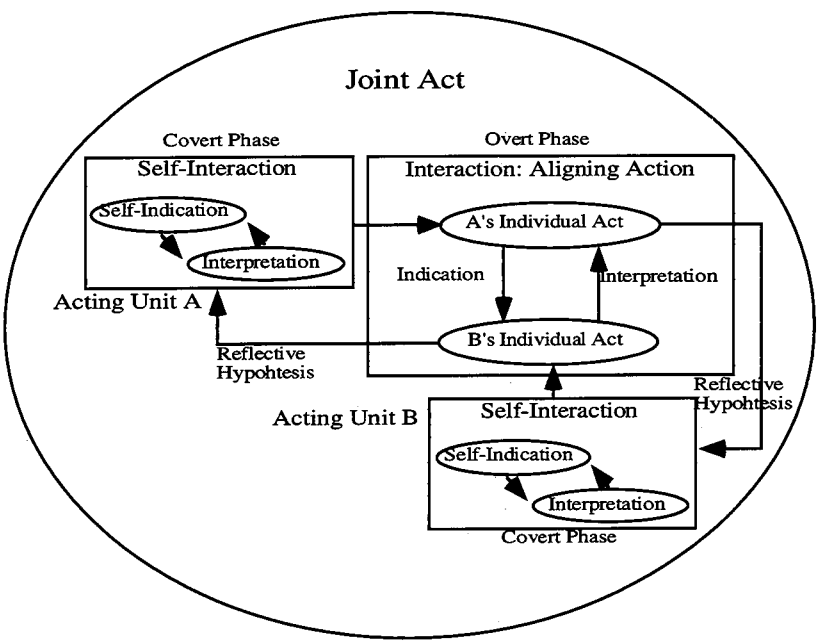

図1　（**Morrione**, 1975 : 212 **Fig**.2を一部参照して作成）

kage：人間の集団生活を構成するのは，連携的アクトの連鎖が形成する大規模で複合的なネットワークである（図2）。

制度体とは分節化したアクトの配列 alignment にほかならない。小規模で単純な配列も，大規模で複雑な配列も，おなじく連携的アクトを構成単位としている以上，同一の枠組で分析することができる。

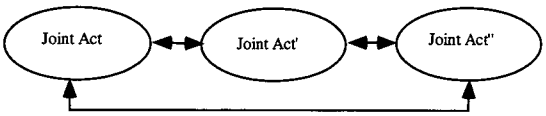

図2　連携的アクトの水平的連結

③連携的アクトの垂直的連結 vertical linkage：連携的アクトは，過去に形成されたアクトとの継続性を有し，参与する行為単位による従前の経験を背景として産出されるという意味で，固有のキャリアなり歴史を有する（図3）。

アクトに参与する行為単位は，継起的に出会う新奇な状況にたいする適切な状況定義を，共通の資産として蓄積していく。こうした状況定義がアクトの反復的形成を担保する。

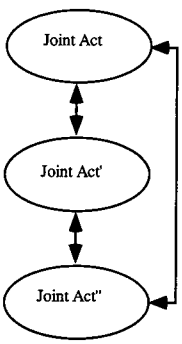

図3　連携的アクトの垂直的連結

これらに加えて，さらに三つの論点を重要な含意として引き出しておこう。

④外的世界の頑固な性質 obdurate character：Bの個別アクトはAが事前の自己相互行為の段階で措定した仮説の妥当性を検証する根拠として機能する。

⑤構造決定論の否定：外的社会構造であれ内的心理構造であれ，「構造」によって連携的アクトの形成方向が「決定」されることはない。自己／社会的相互行為はあくまでも独自の形成過程 formative process in its own right として待遇しなければならない。

すべての社会的な事象は，行為の集積としてある。「構造」が何かを「する」ことはありえない。したがって社会学者は行為や相互行為やアクトに止目するプラグマティズム（行為主義）の立場に立つべきである。

⑥行為単位：個人・集合体・組織のいずれもが行為単位の資格をもちうる。

以上みたように，連携的アクト論は社会的事象をミクロ／マクロという二つの水準に分割することを注意深く回避すべく立論されている。ブルーマーは終始一貫して両水準を分割する必要を認めていない（Morrione and Farberman, 1981）。しかしながら，「構造機能主義への対抗的潮流の登場」という論争的コンテクストで書かれ，また読まれたため，その含意が十分に斟酌されたとはみなしがたい。加えて，ブルーマーのテクストにミスリーディングな言述が散見されることも認めざるをえない。一例として，社会組織や社会の構造的特性が相互行為状況とどのように切り結ぶかについて述べたくだりを引こう。

シンボリック相互行為論の立場からみると，社会組織とは行為単位による行為の展開を囲繞する枠組である。「文化」や「社会システム」「社会成層」「社会的役割」といった諸々の構造的特性 structural features は，行為単位の行為にたいして諸々の条件を設定するが，その行為を決定しはしない。（中略）社会組織は行為の一成分であるが，それはたんに人びとが行為する状況を形成するのは社会組織であり，また，みずからがおかれた状況を解釈するさいに人びとがもちいるかっちりと揃ったシンボルを供給するのは社会組織である，というほどのことでしかない（Blumer, 1969：87-88＝訳：113）。

しばしば引証される箇所であるが，G.A.ファインが指摘しているように，ここでは決定論を回避しようとおかれた「たんに…ほどのことでしかない (only)」という一語が，行為選択にあたって状況の外部から加えられる制約を不当に軽視するニュアンスを醸成している(Fine, 1991 : 164)。この一語が配置されることによって，社会組織は行為単位の行為にたいする条件を設定し，当該の状況についての適切な解釈図式を供給する，という重要な論点が覆い隠されてしまっているのである。ブルーマーのテクストを「可能性の中心」において読むためには，一方でそれらが書かれたコンテクストに十分注意深くありながら，他方でコンテクスト依存的な修辞表現にとらわれすぎることも避けねばならない。

冒頭で述べたように，特殊なコンテクストのもとで生じたこうした解釈のもつれを解きほぐし，ブルーマーのテクストをその業績の全体像と関連づけて再読解する試みは，ミクローマクロ問題と深くふれあうかたちで展開された。ちょうどブルーマーがミード思想の社会学的含意を明示化してみせたように，後続の相互行為論者はブルーマーのテクストに伏在する（あるいは相互行為論のアイデアに伏在する）マクロ社会学的含意の明示化を図ってきたのだということもできる。

次節では，そうした議論の中核を占める「交渉的秩序論」を中心に，ブルーマーの論点の継承・展開を跡づけてみたい。

4．交渉的秩序論

相互行為論の立場からミクローマクロ・リンケージをめざす近年の試行は，ストラウスが提起した交渉的秩序論をめぐってすすめられてきた。交渉的秩序論から派生した議論として，メゾ構造(領域）論と社会的世界論をあげることができる。

ストラウスは共同研究者とともに合理主義的・構造機能主義的な従来の組織論を代替するアプローチを模索し，60年代におこなった病院組織研究の理論的成果として交渉的秩序パースペクティヴを提起・精錬してきた。とくに70年代以降は，組織と社会秩序をとらえる概念枠組の構築を自覚的にすすめている（Maines and Charlton, 1985)。

交渉的秩序論が提起したさまざまな論点のなかから，ここでは核心的なポイントとして，このパースペクティヴが「構造」をどのようにとらえているかという問題を取り上げたい。ストラウスがブルーマーから継承した相互行為論の「構造」観を明示することは，そのまま「非構造的偏向」という評言の不当性を示すことになるはずである。

ストラウスは，日常生活でもっともひんぱんに生じる相互行為の形態が「交渉 negotiation」であると前提し，秩序モデルを構築する建材として交渉を採用する。交渉的相互行為過程を直接包囲する環境を「交渉コンテクスト negotiation context」と呼び，交渉コンテクストをさらに包囲する環境を「構造コンテクスト structural context」と呼ぶ。

交渉コンテクストの概念は，B.G.グレイザーとともに提出した「覚識コンテクスト awareness context」概念（Glaser and Strauss, 1964; 1965）をふまえ，より広範な社会的事象に適用すべく一般化したものである。したがって二つの概念はおなじアイデアを共有する（Strauss, 1978 : 99)。

コンテクストとは，相互行為よりも規模の大きな構造的単位 structural unit であり，相互行為を囲繞し，相互行為に影響をおよぼすものとされている。覚識コンテクストとは，どんな特定の人びと・集団・組織・コミュニティ・国家が特定の問題についてどんなことを知っているかということの組み合わせの総体である（Glaser and Strauss, 1964 : 670）(3)。

たとえば，病院内での医師－患者関係においては，患者の病状をめぐる情報の配分状態により四つのコンテクストが成立しうる。①医師と患者が情報を共有し，また情報を共有していることを明示しあう「開放 open」コンテクスト。②医師が患者から情報を秘匿する「閉鎖 closed」コンテクスト。③医師による情報の秘匿を患者が疑う「疑念 suspicion」コンテクスト。④（患者が医師による情報の秘匿を完全に知ることによって）実際は両者が情報が共有しているのに，互いにそれに気づいていないかのごとくふるまう「偽装 pretense」コンテクスト。医師－患者間の相互行為は，これ

ら四つのコンテクストのなかでおこなわれる。いうまでもなく，患者の病状の変化や入院の長期化などによって，たとえば①→②→③→④（→①）というようなコンテクストの移行もひんぱんに生じる。

覚識コンテクスト論は，コンテクストを囲繞する「構造的条件 structural conditions」への注目を促す。構造的条件を構成するのは，社会構造単位（役割・地位・関係・組織・コミュニティ・国家・全体社会…）の諸特性である（Glaser and Strauss, 1964 : 671）。たとえば，病院内では，患者の病状にかんする情報をもつ医師がコンテクストの選択と維持にあたってイニシアティヴを握っている。回復の見込みのない患者にたいしては「閉鎖」コンテクストが選ばれる傾向があるが，それは，①たいていの患者はじぶんの死期がどれほど切迫しているか判断することができない，②診断記録の管理や医療スタッフへの訓戒をつうじて，病院組織じたいが医学的情報を患者から秘匿すべく編制されている，③医師が所属する専門職集団は，情報の秘匿を倫理的な観点から合理化する根拠を供給する，④患者の家族も情報の隠匿にすすんで共謀する傾向がある，といったさまざまな構造的条件――医師－患者の相互行為状況の外部で，両者の相互行為が創発する以前におおかた設定されている行為の布置連関――が作用する結果であると説明される。

交渉的秩序論においては，構造的条件のレパートリー総体を指称する概念として構造コンテクストが用意された。構造コンテクストは当面の交渉にとってレリヴァントな構造的条件を交渉コンテクストに供給するコンテクストとして位置づけられている。

一見して明らかなように，覚識コンテクスト論，交渉コンテクスト論のいずれにおいても「構造的 structural」という形容詞が多用されている。それでは，「構造」とははたして何か。ストラウスは交渉秩序アプローチにおける「構造」観を簡潔かつ明確に述べている

構造とは，研究している当の現象にかかわる構造的「条件」のことを指し，またそれを指していうべきである（Strauss, 1978 : 257）。

前節で引用したブルーマーのテクストを参照すればわかるように，構造を条件と等号で結ぶ発想にはブルーマーの刻印が明確に認められる。ストラウスは「自由／拘束という古典的な問題」を念頭におきながら議論を組み立てている（Strauss, 1978 : 260）。したがって，「条件」ということばは注意ぶかく読まねばならない。ここでいう「条件」とは，社会構造単位の諸特性の布置連関について当面検証ずみとされている仮説群（＝構造）が，交渉的相互行為過程においてある選択肢を可能とする「資源 resources」として利用される一方でべつの選択肢を制約する「拘束 constraints」として作用するという二重性を帯びる事態を指示している。

また，交渉的相互行為過程と交渉コンテクストとの関係を双方向的にとらえることによって，ブルーマーと同様に構造決定論が斥けられていることにも注目したい。構造コンテクストは交渉コンテクストを条件づけ，交渉コンテクストは交渉的相互行為過程を条件づける。しかし他方で，構造コンテクストから交渉コンテクストに引き入れる条件の選択は交渉過程の経緯に依存しており[4]，条件の「資源性」や「拘束力」は交渉過程でじっさいに適用されつづけることによって維持され，ときに改変される[5]。

構造的条件は特定の交渉過程で特定の結果 consequences をもたらし，その結果が以後の交渉過程にとっての条件を構成する。同一の結果をもたらしつづけるかぎりにおいて条件は安定性をもち，交渉過程の反復的再生産を支える。ここには，連携的アクトの反復性と垂直的連結という論点の継承を見いだすことができる[6]。

ミクローマクロ・リンケージにたいするストラウスの戦略は，構造／過程という二元論を溶解しようとするところにある。過程はつねにいくらかは構造化されているが，構造はつねに過程のなかでその効力を検証されるという相互反照性を，ストラウスは「構造的過程 structural process」あるいは「過程のただ中にある構造 structure in process」と表現する（Strauss, 1978 : 257, 258）。交

渉的秩序にかわる新たな概念として最近の論稿で提唱している「過程的秩序構成 processual ordering」(Strauss, 1993 : 254) という概念にも，おなじ問題意識の持続をみとめることができる(7)。

5．おわりに

交渉的秩序論をはじめとする相互行為論の試みにたいする一般的な評価はいまだ定まっていない。たとえば，これらの議論は「構造」を「意味」「コンテクスト」「活動」といったミクロレヴェルの現象に還元したうえでとらえようとする「望遠鏡戦略 telescoping strategies」である，とする批判がある (Prendergast and Knottnerus, 1991 : 163-165)。こうした批判者は，相互行為論のメタ理論は，客観主義 objectivism 対 主観主義 subjectivism，決定論 determinism 対 主意主義 voluntarism，唯物論 materialism 対 観念論 idealism といった二元論の図式から脱却できずにおり，二項のうち後者の系列と一方的に結託しているという (Prendergast and Knottnerus, 1991 : 183)。

しかし，相互行為論のメタ理論＝プラグマティズムは，まさしくそうした二元論的を乗り越える試みであったことを想起すべきである (Shalin, 1986)。もともとミードやブルーマーにとって「意味」や「コンテクスト」は「活動（＝アクト）」を経過することで創発する現象と考えられていた。相互行為論の基底を支えているのは，社会とは人びとが「一緒に何事かをおこなうこと Doing Things Together」(Becker, 1986) としてのみ創発する現象であるというごく自明なルート・イメージである。アクトに定位するプラグマティックな姿勢を堅持しながら「マクロ」な現象に射程を拡大しようとするとき，「望遠鏡」のメタファーは積極的に活用されてよい。生産的な批判は，むしろ「望遠鏡」の精度に向けられるべきではないだろうか。

註

(1) 本稿では，シカゴ学派社会学とプラグマティズムに知的起源をもち，「行為 action」「相互行為 interaction」「アクト act」「行為すること acting」の分析・記述を社会学的営為の中核に据えるアプローチの総称として「相互行為論」をもちいる。ブルーマーの造語になる「シンボリック相互行為論 Symbolic Interactionism」の使用を避けるのは，本稿で取り上げる論者がみずからの立場をその用語によって指示することに同意するとは必ずしもいえない現状があるからである (e.g. Strauss, 1993)。

(2) この概念を立てるにあたってブルーマーが参照するのは，G.H.ミードの「社会的アクト social act」の議論である。ミードによれば，Aの身振りにBが調整的な反応を返すことでAの身振りの意味が確定し，同時にAの身振りがきっかけを作ったひとまとまりの社会的アクトが完成する (Mead, 1934 : 80＝訳：87)。

(3) ブルーマーと同様に，ここでも個人・集団・組織・国家などが同等に行為単位の資格を与えられていることに注目したい。

(4) E.ゴフマンの「非関連ルール rules of irrelevance」「変形ルール transformation rules」の概念が問題にしているのは，これときわめて類似した事態である (Goffman, 1961)。また，ゴフマンはしばしば構造主義，構造決定論者という評価を受けてきたが (Gonos, 1977; Denzin and Keller, 1981; Flaherty, 1990)，「相互行為秩序 the interaction order」と「社会構造」との関係を論じたさいには loose coupling というアイデアを採用し，両者の相対的自律性を主張している (Goffman, 1983)。loose coupling はもともと組織論の領域で提案された概念であるが，交渉的秩序論との親和性も指摘されている (Weick, 1976; Thomas, 1984)。

(5) メインズは，「社会構造」と「相互行為過程」との中間にあって構造的条件をめぐる攻防を媒介する交渉コンテクストを「メゾ構造」と名づけ，独自の分析領域として画定した (Maines, 1879; 1982)。メゾ構造とは，「社会構造が上演され enacted，そうして上演されることをとおして有意味な参与パターンとなる」領域であり，メゾ構造分析の眼目は，

従来は静態的にとらえられてきた「結果 consequences」や「条件 conditions」という概念を，相互行為を契機として不断に維持・更新・変更されるものとして動態的に取り扱おうとするところにある（Maines, 1982 : 275)。

(6) H.S.ベッカーの芸術世界論における「黙約 conventions」概念もおなじ含意をもつ。ベッカーによれば，芸術作品の創作はさまざまな人びとの協働によって成立する集合的行為 collective action である。創作過程に関与する人びとは，慣例化し，合意が成立している黙約にしたがって仕事をすすめる。黙約への違背はさまざまな面でリスクの発生と裏腹の関係にあるため，芸術家をふくむすべての協働関与者にとって容易に犯すことのできない拘束力をもつ。ここでいう集合的行為はかれ自身も示唆しているように，明らかに連携的アクトと互換的な概念である（Becker, 1974 : 775)。

連携的アクトの水平的連結というもう一つの含意は，社会的世界論において，環節化 segmentation と交差 intersection をキー概念に精緻化されている。クリングとガーソンは「社会的世界はコミュニケーションのネットワークによって結ばれた，共通ないし連携的な活動や関心によって構成される」と規定する（Kling and Gerson, 1978 : 26)。環節化とは社会的世界を構成する行為単位の関心が細分化することによって活動単位が下位世界 subworld へと分化するプロセスを指し，交差は社会的世界やその下位世界を横断して相互行為が創発する事態を指している。社会的世界論は，連携的アクトの水平的連結というブルーマーの論点をより精密に展開する試みとして位置づけることができよう。

(7) ベッカーのコミットメント commitment 概念にも，こうした問題意識の共有をみとめることができる。ベッカーは，拘束の創発を社会過程において把捉する分析枠組としてコミットメント論を提起した(Becker, 1960)。その重要なポイントは，以下の二点にある。

第一に，行為路線の一貫性 consistency of lines of action という要求にしたがうかぎり，行為単位がある時点で選択した行為は後続の行為選択を拘束する。行為単位は連携的アクトを共同で構成する対向的行為単位にたいしてみずからの行為路線の一貫性を呈示する義務を負う。義務の不履行にはなんらかのペナルティが課せられる。このように行為選択は賭け金を張ることにたとえることができる。この論点はブルーマーのいう連携的アクトの垂直的連結と容易に接続することができよう。

第二に，ある連携的アクトである行為路線を選択することは，おなじ行為単位が関与するべつの連携的アクトでの行為選択にさいしても拘束力を発揮する。行為路線の選択にあたって，行為単位はメインの賭け金とともにいわば副次的賭け金 side bets を張っていることになる。この論点は，連携的アクトの水平的連結と容易に接続することができよう。

引用文献

Alexander, J.C. and B.Giesen

1987. "From Reduction to Linkage : The Long view of the Micro-Macro Debate." In J.C. Alexander, B.Giesen, R.Munch, and N.J.Smelser (Eds.). 1987. *The Micro-Macro Link*. Univ. of California Press : 1-42.

Becker, H.S.

1960. "Notes on the Concept of Commitment." *American Journal of Sociology* 66 : 32-40.

1974. "Art as Collective Action." *American Sociological Review* 39 : 767-776.

1982. *Art Worlds*. Univ. of California Press.

1986. *Doing Things Together : Selected Papers*. Nothwestern Univ. Press.

Blumer, H.

1969. *Symbolic Interactionism : Perspective and Method*. Prentice-hall. (1991. 後藤将之訳『シンボリック相互作用論――パースペクティヴと方法』頸草書房.)

1981. "George Herbert Mead." In B.Rhea

(Ed.). *The Future of the Sociological Classics*. Allen and Unwin : 136-176.

1983. "Going Astray with a Logical Scheme." *Symbolic Interaction* 6 : 127-137.

1990. *Industrialization as an Agent of Social Change : A Critical Analysis* (Edited and Introduction by D.R.Maines and T.J.Morrione). Aldine de Gruyter.

Clarke, A.E.

1991. "Social Worlds / Arenas Theory as Organizational Theory." In D.R.Maines (Ed.). *Social Organization and Social Process : Essays in Honor of Anselm Strauss*. Aldine de Gruyter.

Day, R. and J.V.Day.

1977. "A Review of the Current State of Negotiated Order Theory : An Appreciation and a Critique." *Sociological Quarterly* 18 : 126-142.

Denzin, N.K. and C.M.Keller.

1981. "*Frame Analysis* Reconsidered." *Contemporary Sociology* 10 : 52-60.

Farberman, H.A., C.Couch, and D.Preston.

1979. "A Review Symposium : Anselm L. Strauss — *Negotiations : Varieties, Contexts, and Social Order*." *Symbolic Interaction* 2 : 153-168.

Fine, G.A.

1984. "Negotiated Orders and Organizational Cultures." *Annual Review of Sociology* 10 : 239-262.

1991. "On the Macrofoundations of Microsociology : Constraint and the Exterior Reality of Structure." *Sociological Quarterly* 32 : 161-177.

1992. "Agency, Structure, and Comparative Contexts : Toward a Synthetic Interactionism." *Symbolic Interaction* 15 : 87-107.

Fine, G.A. and S.Kleinman.

1983. "Network and Meaning : An Interactionist Approach to Structure." *Symbolic Interaction* 6 : 97-110.

Fisher, B.M. and A.L.Strauss.

1978. "Interactionism." In T.Bottomore and R.Nisbet (Eds.). In *A History of Sociological Analysis*. Basic Books : 457-498.

Flaherty, M.G.

1989. "The Depiction of Symbolic Interactionism in Theory Textbooks." *Studies in Symbolic Interaction* 10 : 25-41.

1990. "Two Conceptions of the Social Situation : Some Implications of Humor." *Sociological Quarterly* 31 : 93-106.

Glaser, B.G. and A.L.Strauss.

1964. "Awareness Contexts and Social Interaction." *American Sociological Review* 29 : 669-679.

1965. *Awareness of Dying*. Aldine. (1988.木下康仁訳『死のアウェアネス理論と看護 ── 死の認識と終末期ケア』医学書院.)

Goffman, E.

1961. *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction*. Bobbs-Merril. (1985. 佐藤　毅・折橋徹彦訳『出会い　相互行為の社会学』誠信書房.)

1983. "The Interaction Order." *American Sociological Review* 48 : 1-17.

Gonos, G.

1977. "'Situation' versus 'Frame' : The 'Interactionist' and the 'Structuralist' Analyses of Everyday Life." *American Sociological Review* 42 : 854-867.

Hall, P.M.

1987. "Interactionism and the Study of Social Organization." *Sociological Quarterly* 28 : 1-22.

1991. "In Search of the Meso Domain : Commentary on the Contributions of Pestello and Voydanoff." *Symbolic Interaction* 14 : 129-134.

Hall, P.M. and D.A.Spencer-Hall.

1982. "The Social Conditions of the Negotiated Order." *Urban Life* 11 : 328-349.

Huber, J. (Ed.).
1991. *Macro - Micro Linkages in Sociology*. Sage.

Kling, R. and E.M.Gerson.
1978. "Patterns of Segmentation and Intersection in the Computing World." *Symbolic Interaction* 1 : 24-43.

Knorr-Cetina, K. and A.Cicourel (Eds.).
1981. *Advances in Social Theory and Methodology : Toward an Integration of Micro- and Macro- Sociologies*. RKP.

Lyman, S.M.
1984. "Interactionism and the Study of Race Relations at the Macro-Sociological Level : The Contribution of Herbert Blumer." *Symbolic Interaction* 7 : 107-120.
1988. "Symbolic Interactionism and Macrosociology." *Sociological Forum* 3 : 295-301.
1991. "What Industrialization Actually Is and Does." *Contemporary Sociology*. 20 : 173-175.

Lyman, S.M. and A.J.Vidich.
1988. *Social Order and the Public Philosophy : An Analysis and Interpretation of the Work of Herbert Blumer*. Univ. of Arkansas Press.

Maines, D.R.
1977. "Social Organization and Social Structure in Symbolic Interactionist Thought." *Annual Review of Sociology* 3 : 235-259.
1978. "Structural Parameters and Negotiated Orders : Comment on Benson, and Day and Day." *Sociological Quarterly* 19 : 491-496.
1979. "Mesostructure and Social Process." *Contemporary Sociology* 8 : 524-527.
1982. "In Search of Mesostructure : Studies in the Negotiated Order." *Urban Life* 11 : 267-279.
1988. "Myth, Text, and Interactionist Complicity in the Neglect of Blumer's Macrosociology." *Symbolic Interaction* 11 : 43-57.
1989. "Repacking Blumer : The Myth of Herbert Blumer's Astructural Bias." *Studies in Symbolic Interaction* 10 : 383-413.
1990. "Societal Organization and Civic Morality in the Work of Herbert Blumer." *Contemporary Sociology* 19 : 469-473.

Maines, D.R. and J.C.Charlton.
1985. "The Negotiated Order Approach to the Analysis of Social Organization." In H. A.Farberman and R.S.Perinbanayagam (Eds.). *Foundations of Interpretive Sociology : Original Essays in Symbolic Interaction*. *Studies in Symbolic Interaction*, Supplement 1 : 271-308.

Maines, D.R. and T.J.Morrione.
1990. "On the Breadth and Relevance of Blumer's Perspective : Introduction to his Analysis of Industrialization." In H. Blumer. *Industrialization as an Agent of Social Change : A Critical Analysis*. Aldine de Gruyter : xi-xxiv.

Manning, P.K.
1977. "Rules in Organization Context : Narcotics Law Enforcement in Two Settings." *Sociological Quarterly* 18 : 44-61.

Mead, G.H.
1934. *Mind, Self, & Society* (Edited and with an Introduction by C.W.Morris). Univ. of Chicago Press. (1973.稲葉三千男・滝沢正樹・中野　収訳『精神・自我・社会』青木書店.)

Meltzer, B.N., J.W.Petras and L.T. Reynolds.
1975. *Symbolic Interactionism : Genesis, Varieties and Criticism*. Routledge.

Morrione, T.J.
1975. "Symbolic Interactionism and Social Action Theory." *Sociology and Social Research* 59 : 201-218.
1991. "A Book Review (of Lyman, S.M.

and A.J.Vidich, 1988).” *Symbolic Interaction* 14 : 489-494.

Morrione, T.J. and H.A.Farberman.

1981. “Conversation with Herbert Blumer : I, II.” I : *Symbolic Interaction* 4(1) : 113-128, II : *Symbolic Interaction* 4(2) : 273-295.

Mulllins, N.C. and C.J.Mullins.

1973. “Symbolic Interactionism : The Royal Opposition.” In N.C.Mullins. *Theories & Theory Groups in Contemporary American Sociology*. Harper & Row : Chap.4.

Musolf, G.R.

1992. “Structure, Institutions, Power, and Ideology : New Directions within Symbolic Intereactionism.” *Sociological Quarterly* 33 : 171-189.

Pestello, F.G. and P.Voydanoff.

1991. “In Search of Mesostructure in the Family : An Interactionist Approach to Division of Labor.” *Symbolic Interaction* 14 : 105-128.

Prendergast, C. and J.D.Knottnerus.

1993. “The New Studies in Social Organization : Overcoming the Astructural Bias.” In L.T.Reynolds (Ed.). *Interactionism : Exposition and Critique* (Third Edition). General Hall : 158-185.

Scanzoni, J.

1979. “The Centrality of Negotiation to the Study of Social Organization.” *Contemporary Sociology* 8 : 528-530.

Shalin, D.N.

1986. “Pragmatism and Social Interactionism.” *American Sociological Review* 51 : 9-29.

Strauss, A.L.

1978a. *Negotiations : Varieties, Contexts, Processes, and Social Order*. Jossey-Bass.

1978b. “A Social World Perspective.” *Studies in Symbolic Interaction* 1 : 119-128.

1982a. “Social Worlds and Legitimation Processes.” *Studies in Symbolic Interaction* 4 : 171-190.

1982b. “Interorganizational Negotiation.” *Urban Life* 11 : 350-367.

1984. “Social Worlds and Their Segmentation Processes.” *Studies in Symbolic Interaction* 5 : 123-139.

1991. “Blumer on Industrialization and Social Change.” *Contemporary Sociology* 20 : 171-172.

1993. *Continual Permutations of Action*. Aldine de Gruyter.

Strauss, A.L., L.Shatzman, R.Bucher, D. Ehrlich, and M.Sabshin.

1964. “Negotiated Order and and the Coordination of Work.” In A.L.Strauss. 1990. *Creating Sociological Awareness : Collective Essays and Symbolic Representations*. Transaction. (Originally published as a chapter in Strauss et al. 1964. *Psychiatric Ideologies and Institutions*. Free Press.)

Thomas, J.

1984. “Some Aspects of Negotiated Order, Loose Coupling and Mesostructure in Maximum Security Prisons.” *Symbolic Interaction* 7 : 213-231.

Weick. K.E.

1976. “Educational Organizations as Loosely Coupled Systems.” *Administrative Science Quarterly* 21 : 1-19.

Wood, M and Wardell, M.L.

1983. “G.H.Mead’s Social Behaviorism vs. The Astructural Bias of Symbolic Interactionism.” *Symbolic Interaction* 6 : 85-96.